2011年（平成23年）
第38号
（2月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

平和への浄財『３億１８６４万円』を計画　～立正佼成会一食平和基金～

立正佼成会一食平和基金運営委員会は、平成２３年次の予算総額を、「貧困の削減」「環境保全」「難民支援」など９分野を対象に３億１８６４万４千円と計画した。本会独自の平和活動である「ゆめポッケ」をはじめ、「アフリカへ毛布をおくる運動」「エチオピア植林事業」など国連やＮＧＯ（非政府機関）と協力したさまざまな活動に役立てられる。

今年の計画では、いのちの尊厳を守るという観点から、「貧困の削減」「環境保全」「難民支援」の３分野の推進に重点が置かれた。

「貧困の削減」では、第１６回庭野平和賞の受賞団体の聖エジディオ共同体が進める「アフリカ・ＨＩＶ／エイズ事業」など。「環境保全」の分野では、内戦や干ばつで疲弊したエチオピアの地域開発を目指す「エチオピア植林事業」など。「難民支援」では、「ゆめポッケ」や日本に逃れてきた難民への支援など。また、「教育・育成」分野では、内戦中に破壊された仏教とクメール文化の復興を図る「カンボジア仏教と開発推進事業」などに予算計上されている。

平成23年次「一食平和基金」予算

分野	予算額（円）
貧困の削減	137,806,000
難民支援	70,684,000
環境保全	10,010,000
教育・育成	24,918,000
福祉支援	19,510,000
緊急助成	20,050,000
運動推進	9,390,000
運　営　費	8,236,000
そ　の　他	18,040,000
合　　計	318,644,000

また、これまでは国際的な支援事業が中心になっていたが、会員のより身近なところで、一食運動の支援がなされるようにと、「地域応援プロジェクト」の試験的実施が決定した。

今回は、全国の教会の中から６教会が選ばれ、近畿では神戸教会が選定された。支援対象の基準となるのは、①教会が所在する都道府県に拠点がある②公益目的の非営利団体である③一食運動の精神にふさわしい活動（社会的弱者への支援、環境保全、人権擁護、伝統文化の継承など）を行っていることを満たしている団体とされている。

「一食を捧げる運動」では、基本の精神を三つの心で表わしている。一つ目は「同悲」で飢餓や貧困など困難な状況に苦しむ人々に思いをよせる心。二つ目は「祈り」で笑顔と安らぎを願う心。三つ目は「布施」で幸せに感謝し喜びを分かち合うことだ。

そこで、朝昼晩の食事のうち一食を抜いたり、好みのコーヒーを飲まずに、その食費分を「立正佼成会一食平和基金」に献じるという運動が進められている。京都教会においても、毎月１日と１５日に参拝した会員が一食分の食費分を布施している。そして、その浄財が集められて「一食平和基金」として本部に送られている。

お知らせ（３月の教会行事）

３月	１日（火）	朔日参り（布薩の日）	９時～
	４日（金）	開祖さまご命日	９時～
	５日（土）	創立記念日	９時～
	１０日（木）	脇祖さまご命日（大法座）	９時～
	１５日（火）	釈迦牟尼仏ご命日	９時～
下　旬		春の彼岸会　（各支部）	

時事刻々

２月15日は「春一番名付の日」とされている。壱岐郷ノ浦の漁師の間で春の初めの強い南風が「春一」と呼ばれていたのが語源だという。

今年の寒さは身にこたえる。景気が冷えて懐も寒いのに、寒さで休日に出歩く人が減っていると、タクシーの運転手が嘆いていた。

京都気象台の発表によると、昨夏は、猛暑日が35日、熱帯夜が42日とともに観測史上初だという。ほんの半年前は、本当に暑かったが、季節は確実にやってくる。

国会では、与野党の議論の中身は寒い状態が続いている。政界にも春一番が吹いてくれることを、多くの国民が期待していることだろう。

仏教では「諸行無常」＝すべてのものごとは変化すると教えている。目先のことだけに一喜一憂するのでなく、将来に希望をもって、今なすべきことをしようという。そうしていれば、必ず春一番がやって来よう。

新宗連京都各教団の青年が初会合

１月２１日（金）、新宗連京都府協議会加盟教団の天恩教・松緑神道大和山・立正佼成会・新宗連青年会近畿連盟担当事務局から９名の青年たちが集まった。天恩教理事長の鉢呂金太郎氏の乾杯で始まり、終始和やかな雰囲気の会合となり、今後のこととして、各教団の青年同士の交流を深めるとともに、祇園祭の鉾曳きボランティアの参加推進などが話し合われた。

二十歳の門出をみんなで祝う　第４５回成人式

１月１５日（土）、京都教会において、６人の新成人を迎えて、第４５回成人式が開催された。毎年の恒例で、前年の成人者が新成人を祝うために成人式を企画・実施した。

一部の式典で、成人者の代表が「二十歳になった決意」の発表、中村教会長の祝辞があった。その後の法座で『親からのメッセージ』を受け取った成人者は、あらためて親への感謝、家族との絆をさらに深めたという。二部は、青年部の楽しいアトラクションなど、和気あいあいとしたパーティーが行われた。

１０日間の寒中読誦修行を実施

１月２１日（金）から３０日（日）の１０日間、京都教会において寒中読誦修行が行なわれた。早朝６時前に集まった多数の会員により、法華三部経１０巻の通読がなされた。

毎日参加した会員は、身・口・意の三業を浄め、様々な出会いや現象を仏さまの見方に近づける機縁となるようにと願っていた。

「福は内、鬼も内」と幸福願って節分祭を開催

１月３０日（日）、京都教会において、兎年生まれの年男・福娘を含む、多数の会員が集まって、節分祭が行なわれた。読経供養の後、年男・福娘の４人の方の感謝の発表、記念品授与、ＡＫＢ４８を真似たＲＫＫ４８踊りと寸劇、そして豆まきが行なわれた。

節分は２月３日だが、節分祭でまかれた豆を信者さんに届けたり、自宅に持ち帰り、節分の日に家族と豆まきしてもらいたいとの願いでこの日に実施された。

東山普門太鼓（太鼓部）『七彩の風』で発表

１月２２日（土）、京都教会の太鼓部「東山普門太鼓」が、左京区静市にある障害福祉サービス事業所『七彩の風』での慰問演奏を行った。

太鼓部のメンバーは、初めての知的障害施設ということで、少し緊張したようだが、「喜んでもらえる太鼓を打とう！」との思いで出演したという。

施設の入居者は、施設内に鳴り響く太鼓の演奏を目を輝かせて聞き入っていた。そして、出演者の好意で入居者が太鼓に直接触れる機会が設けられ、一つの太鼓を４～５人で打っていたが、みんな笑顔で、楽しんでいた。

今回の出演で太鼓部の代表者は「施設の方々だけではなく私達もとても楽しい時間が過ごせました。今回はとても良い経験でした」と感想を述べた。今後、いろいろなの施設に出張したいと希望している。

●ご功徳をいただく　（佼成会のことば）

「ご功徳をいただく」という言葉には「仏さまのお供物をいただく」という意味と、「叱られる」という意味があります。この「叱られる」という意味について、少し詳しく述べてみます。先輩幹部が厳しい言葉を発する時には「この人も信仰の功徳をいただき、幸せになってほしい」という慈悲が込められています。それを受けた人も先輩幹部の心がわかると、自分を深く内省して過ちに気づくことができます。この「気づき」が功徳なのです。「ご功徳をいただく」ことによって、自分の過ちを悔い改め、生まれ変わっていくのです。

また、何も失敗しなくても、時には先輩幹部から理屈に合わないことであれこれと叱咤されることもあります。しかし、それもありがたい「ご功徳」なのです。これも仏さまの説法と受け止め、「言われるのだから、そうなんだ」と素直な気持ちになって聞かせていただく。すると、先々になって大きな試練にぶつかつかり、その「ご功徳」に込められた教えが生かされてくることがしばしば起こってきます。

今月の言葉　～あたたかな「老婆心」～

京都教会長・中村憲一郎

１月は「行く」、２月は「逃げる」と申しますが、年が明けたと思っていたらもう２月です。

３日には節分を迎え、気学の上では「辛卯・七赤金星」の年が始まります。今年は年初めから、北は大寒波、南は大洪水と地球温暖化の影響が大変深刻化しているようです。文字通り「辛い」年の幕開けです。

「辛い」といえば、日本社会ではいま**「無縁社会」**という言葉が横行しています。他人はもちろん家族の命さえ気にもかけない風潮があるというのです。何とも悲しい現実ですが、このような時代にあって、私たち一人ひとりに何が求められているのでしょうか。

会長先生は、ずばり『いま私たちにとって大切なのは、人を心から思いやる、**あたたかな「老婆心」**ではないか』とご指導くださいます。一般的に「老婆心」とはあまり良い使われ方をしません。

辞書には「不必要な世話やき、くどすぎる親切」などと記されています。が、会長先生の言う「老婆心」は、世間とは違い「老婆が子や孫を慈しむように師匠が弟子をあたたかく導くこと、またその心が深く厚いこと」です。

この「老婆心（心からの思いやり）」を働かせると、人に安心感や生きる勇気を与え、ついには人生の大転換にもつながるというのです。相手の心情や立場をよく汲みとり、心に寄り添い、一心に相手を思う心で家族や周りの人と接することが、いま時代が希求する私たち一人ひとりの生き方と言っても過言ではありません。

「無縁社会」などという悲しい風潮を乗り越え、本来一人ひとりが有している「人を思う優しい心」が発揮できる世の中の創出に力を尽くして参りましょう。

地域貢献活動の紹介

地域に笑顔を広げたい！　中央明社

１月号で、中央明るい社会づくり運動の会（中央明社）が京都市社会福祉協議会より表彰されたことを紹介したが、その感想を中央明社運営委員長に聞いた。

「私たちは、ここ数年市民の方々との交流を目標に活動してきました。ふれあいバザーやもちつき大会、美化大作戦参加、募金活動等により、明社のメッセージを少しでもアピール出来た事を幸せに思います。その活動により積み立てた基金を寄付でき、感謝状も頂き、三重の喜びを明日へのエネルギーとします。」と喜びのこもった決意を述べた。

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

《慈悲の眼・・・法座》

庭野開祖は「仏さまのような慈悲の眼で見ていけば、みんな幸せになれるんですよ」と言われました。どうしたら私たちは、慈悲の眼を持ち、法座で救いを展開していけるのでしょうか。庭野開祖は次のように述べられています。

「『方等経典は為れ慈悲の主なり』で、法座は慈悲をまず主としないとね。慈悲があれば、法座の問題のすべてが解決され、魅力ある法座になって話されたことが全部実行に移されていく。

相手の人格を礼拝する心になった時にはじめて、あなたの説く言葉が、そのまま仏さまの言葉として相手の心にしみ込んでいくのです。みんなが仏さまの働きの中で生かされているんだから、〝自分がこうなれば相手がこうなる〟ということが、法座の中には一目瞭然と出てくるんですよ。

仏さまの世界に生きていること、自分が仏さまに生かされていることを信じるのは、一人の人を信じることから始まるんです。ほんとうに信じればいいんです。

上手に法を説くよりも、人さまに希望を持たせ、光明を与えるような話し方をするべきであると思います。人々に生きがいを感じさせるような言葉を吐くように常に心がけるべきであると思います。

自分の前に現れた人は、『この私に一つ一つ教えて下さるために、仏さまがつかわして下さったのだ』という気持ちで、合掌し、本当にその人の心を拝む。そうすれば、みんな、相手の方から正直に自分のことを色々話して下さる。法座は立正佼成会のいのちであり、信仰活動の核心なのです。

人間は、悪い所ばかり言ったり見たりしてはいけない。その人の努力している所、苦労している所を、思いやりを持って見てあげるんだよ。」

まず自分が、あたたかな、清らかな心にならなくては、人を救うことはできない、ということなのです。

エコキャップ回収状況

１２月末現在　**４６，８００**個　（ワクチン**５９**人分）

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《遡源》

伝教大師は、その教えをどこで学ばれたのかと、さらに遡ると、中国の天台大師智顗が説かれた佛教教義に行き着く。そして天台大師は、多感な青年期に学問と人格形成の両面にわたり師の慧思から強い影響を受けておられるのである。お二人が初めて大蘇山で会われた時、天台大師は23歳だったといわれる。

その時、南岳慧思は**「昔、霊山においてともに法華経を聞く。宿縁逐うところ、いままた来れり」**といって迎えられたという。かつてインドの霊鷲山で釈尊が法華経を説かれた時、そなたと私はともに連なって教えを聞いた仲間であったというのである。慧思は、すぐれた実践的な仏教を編み出した師である。その師から学んだのち、天台大師はさらに深く、広く考究を重ねて、理論的に整えた体系のうえに総合的な行の体系を構築したとされる。

その天台大師の教学にひかれて、多くの人たちが集まってきた。しかし、集まる人の数は増えても、真に仏法を体得する者が少ないのを反省された天台大師は、発起して、自らの理論をさらに吟味すべく天台山に入られたのであった。時に、太建7年(西暦575年)のことで、陳の皇帝は大師に都にとどまるようにすすめたが、大師は決然として**「我は吾が志に従わんと欲す」**と言われて、天台山に入られたと伝えられている。

その天台山に、いま休ませて頂いているのである。1400年以上も前に、同じこの山で、この場所で、**天台大師が研鑽されたその法脈のうえに自分があらしめられている法縁の不思議さに、庭野開祖は目頭が熱くなる思いだった。**当時、山上の生活は不便で過酷を極めたものだっただろう。だが大師は、仏法を研鑽する生活は楽しいと言われるのである。そうした一大決心をされて天台山に入られただけに、天台大師が示された修行方法は、まことに厳しいものであった。世俗の世界に背を向けて深山にこもって修行しなければ、学ぶことも実践することも難しい教えであったといえよう。それは到底、今日の在家の私たちの日常生活にそのまま用いられるものではなかった。

例えば、十界互具、十如是を基底にして展開される一念三千論にしても、たんなる世界観ではないはずだ。私の心が怒りに支配されれば、そこに地獄界が出現する。私の心が慳貪の心に覆われれば、餓鬼界が出現する。だが、私が苦しみに遇ってこの苦しみをどうしたら克服できるかと教えを求める心を起こし、四諦の法門に耳を傾けるならば、そこに声聞の世界が生まれ、また苦しむ人を見て「お気の毒に」と思い、なんとかしてあげたいという心を起こせば、菩薩の世界が出現する。だから、**ゆめゆめ一瞬の心もおろそかにしてはならないというのが一念三千の教えだと言っていいだろう。**

このように『摩訶止観』で説かれる一念三千論は、**自分の一念によって仏の世界が開け、また逆に地獄をも現出させてしまうことを教えるのだが、そのいずれの可能性も秘めているのが人間だと知ると、自分の心がけこそ何よりも大事であることがわかる。自分の人生は変えようのないものではなく、自分自身の心がけしだいでどのようにも変えられる、明るい可能性に満ちたものなのだという確信、喜びが生まれてくるのである。**

それを庭野開祖は、**「思えば思われる」「自分が変われば相手が変わる」**という、極めて平易な言葉で説いてきた。日常生活に生かすことができる仏教でなくては意味がないというのが庭野開祖の考えだった。

かつて東京大学名誉教授の笠原一男先生が、次のように言われたことがあった。「鎌倉時代の祖師方が偉かったのは、先人の踏襲に甘んじることがなかったことではないか。祖師方は、**『なぜ』と問うとき必ず釈尊に戻ることを忘れなかった」**という先生の言葉が、庭野開祖の胸にははっきりと残っているのである。

翌日、天台山の山頂にある天台大師の霊廟に参拝した。山頂から見下ろすと、天台山は八葉の蓮華のように峰々が連なっている。そのうねりの頂に建つ天台大師の霊廟の前で、庭野開祖は法華経に遇い得た喜びをかみしめなおした。この年、77歳の喜寿を迎えていた。「人身得ること難し、仏法値ふこと希なり」という。法華経にめぐりあうことができて、おのれを捧げて悔いることのない人生を歩むことができた。**「国宝とは何者ぞ。宝とは道心なり。道心あるの人を名づけて国宝と為す」**と伝教大師はおっしゃられている。すべての人々を光輝く宝とするために、この道をひたすら歩み続けるのだと心に誓いなおした。　　（つづく）

渉外部からのメッセージ

節分は季節の始まりの日の前日のことで「季節を分ける」ことの意味がありますね。現在は毎年２月３日ですが、これは１９８５年から２０２４年ごろまでに限ったことであり、２０２５年から（２０２１年からになる可能性あり）は閏年の翌年に２月２日になるとのこと。これは天体の運行に基づくもので未来の日付は軌道計算に基づく予測しかできません。昔の日本人は季節の変わり目には邪気（鬼）が生じると考え、それを追い払うための悪霊ばらい行事を執り行ってきました。何とも豊かな情操心を感じますね。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK京都教会　FAX 075-762-2266